

研究ノート

一般の人たちが地域で歴史を書くとき
——沖縄県の「字誌」編集者へのインタビュー——

高 田 知 和

東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究 第1号 抜刷
2016年（平成28年）3月20日

研究ノート

一般の人たちが地域で歴史を書くとき
——沖縄県の「字誌」編集者へのインタビュー——

高 田 知 和

How the Local Residents Describe Their Local History?: The Interview of the Editor of *Azashi* in Okinawa Prefecture

TAKADA, Tomokazu

Abstract

The aim of this paper is to clarify how the local residents experience and describe the history of their local community. In this endeavor, we focus on the *Azashi*, the book of local history edited in the community in Okinawa prefecture. We clarified the method and theory of writing *Azashi* by conducting the interview of the editor of *Azashi*, who wrote the history of Tokeshi district in Yomitan village. We found a crucial gap between the descriptions of local history written by the local residents and by the professional historians; i.e., there were much more diversity in the contexts of historical description in local residents. These findings stressed the importance of re-examining historical context (historical consciousness) in the present day. Further reviewing of the books of local history including *Azashi* should cast more light on this issue.

Keywords: CHIIKI-SHISHI (BOOK of LOCAL HISTORY), AZASHI, JICHITAI-SHI, HISTORICAL CONSCIOUSNESS

目 次

1. はじめに
2. 自治体史から地域史誌へ
3. 地域史誌を編集する——ある字誌編集者へのインタビュー——
4. 今後の課題

1. はじめに

本稿は、表題の示す如く、地域社会で暮らしている一般の人たちが自分たちの地域の歴史を書くとき、具体的にどうしているのかを紹介するものである。素材は沖縄県で広く編纂されているいわゆる「字誌」であり、同県の一地区で「字誌」を編纂したときの中心人物へのインタビューを検討する。

沖縄県に在住して「字誌」について調べて来た中村誠司によれば、「字誌」とは「小さな地域社会（沖縄でいうシマ社会＝字＝行政区＝部落）が主体となって、つまり字の公的事業としてとりくむ地域の記録（史誌）づくり。「住民による住民のための地域史誌」のことである（中村、1995、45頁）。「字誌」というこの呼び名は沖縄県独特のものであるが、しかしこの定義に従えば、中村自身も指摘しているように、「字誌」はなにも沖縄県だけのものではないことになる（中村、2000、91頁）。事実、一般の人たちが自分の暮らす地域の歴史を綴ったこの種の本は、これまで郷土史などの名称で全国どこでも作られてきた。この点に着目して、筆者は「字誌」という語を用いると、どうしても沖縄県のイメージに引きずられてしまうため、別に「大字誌」という語を用いて、全国の動向（といっても主に近畿以东と沖縄県）について明らかにしたことがある（高田、2015a、65-82頁）。呼び方は違っていても、こうした刊行物の共通するところは、①「狭い地域社会」の、②「歴史」を、③「専門家ではない一般の人たち」がまとめている点にある。歴史学専攻ではなく社会学専攻である筆者が、こうした地域史誌に注目することにはそれなりの理由があつてのことだが、具体的にインタビューを紹介していく前に、まずこの課題の意義について簡単に説明しておきたい。

2. 自治体史から地域史誌へ

筆者は、地域の歴史がどのように書かれてきたかということに、これまで関心を持って調べて来た。その際、最初は市町村史など、いわゆる自治体史を研究対象にした。というのは、筆者自身が2000年前後に関東近県のある市史編纂に参加した時に、このように大部であるばかりか内容も高度な市史をいったい誰が読むのか、市史自体を当該自治体の市民はどのように認知しているのか、いや、そもそも自治体史とは何なのかということに疑問を感じたからであった。その後、各地の自治体史を具体的に調べていくなかで、自治体史には次のような課題があることを認識して、幾つか論考を明らかにした（高田、2005、2009、2010など）。

自治体史を作るにあたっては、今日では多くの場合、専門家である歴史家を中心にして編纂委員会を組織して作るようになっている。その際、当然ながら歴史家たちにとってはどのような歴史を叙述するかが大きな課題となる。近年では、従来の政治史・経済史中心の歴史から社会史的

な叙述が多くなっており、なかでもこれまでの通史からは抜け落ちていた人たちの歴史も、意識的に書かれるようになった。しかし自治体史の場合、そうした歴史の叙述の仕方とは別に、本来であれば自治体史と市民との関係性も問われなければならない。なぜなら、自治体史は公費で作られるのであるから、小なりとはいえ公共事業である。したがって、せつかく公費で作ったのに、市民の誰も読まないし利用しないというのでは本来何にもならない。そのため、自治体史と市民との関係性を問うことも、大きな課題の筈なのである。

そして、実際に自治体史を編纂している歴史家たちにとっても、この課題はある程度自覚されてきた。つまり、これまでの自治体史が、地元住民たちからいわば遊離したものになってしまっていたことへの批判と反省から、幾つかの試みがなされるようになったのである。そうした動きは、具体的には市民とともに作る自治体史や、市民が要望するかたちに沿った自治体史を作ろうという努力となって表われており、例としては（時期はややずれるが）千葉県我孫子市、¹⁾ 埼玉県草加市、²⁾ 兵庫県尼崎市、³⁾ 兵庫県香寺町（現姫路市香寺町）⁴⁾ などが挙げられる。また沖縄県では名護市、那覇市、糸満市、石垣市、竹富町、読谷村などのように、何十年にも渡って編纂事業を続けているところもあり、そのなかで地区の全戸を調査対象にした戦災実態調査を行うなど、市民に還元し得る成果を出して来た。⁵⁾

ただ筆者には、自治体史の編纂にあたって歴史家たちがどんなに努力をしても、市民との距離を縮めるには限界があるように思われる。というのは、一つには自治体の範囲がそもそも広すぎるからである。現在の自治体では、同じ管内に住んでいても知らない場所が大半であり、恐らくそうした知らない土地の歴史が書かれていても、住民たちにとってはピンと来ないであろう。また「平成の大合併」でさらに広域になった自治体の歴史を、一つの歴史書でまとめていくのも地域史として限界がある。

しかし筆者は、より根本的に、自治体史を書く専門家たる歴史家と、非専門家とはいいながらその地に暮らしている地域住民との違いが大きいとも考えている。つまり、その地に住んでいないのに専門家として歴史編纂を委嘱された歴史家が書こうとする歴史と、たとえ歴史学的なトレーニングを受けていなくても住民たちが日々実感している歴史とは、おのずから異なってくるだろうからである。

実は、もともと地域の歴史をまとめたたいという動機からして、両者では違っている。歴史家がある地域を調べるのは、多くの場合、そこが歴史学というディシプリンのなかで、重要な意義や特色を持っているからである（もちろん、これは筆者が専攻する社会学でも変わらない。例えば、近年の社会学では東日本大震災の被災地を調査する研究者が非常に多いが、それはそうした被災地研究が、現代社会や研究史全体のなかで重要な意義と特色を持つと考えるからであることは間違いない）。だが、その地区の住民たちが地域史をまとめたたいと考えるのは、研究上有意義だからではない。それは、単純に自分たちの地域の歴史を知りたいという気持ちからのこともあれば、地域づくりの基盤としてまず歴史を明らかにしておきたいということもある。また、今、記録しておかなければ分からなくなってしまうからという動機もある。このように、地域の歴史を編纂するにあたっては、専門家と非専門家、地域住民とそうでない人では、最初から違っているのである。⁶⁾

この違いに関連して、かつて信濃史学会で活躍した郷土史家の一志茂樹が、いわゆる地方史研究には、「学者が一つのテーマ研究をするために、問題意識をもって、その研究を進むべく地方へ出て必要とする文献史料を集め、その史料を駆使し、その上にのっかって研究を展開する」場合と、「地方における在地研究者」が、「一地方なり一地域社会なりの実態とか、性格とか、ありかた

とかを研究する」場合では、大きく異なっていると指摘していたことが思い出されよう（一志，1976，38頁）。この場合，明らかに一志は，前者を東京などの都市部の大学で歴史的トレーニングを受けた専門家としての歴史家，後者を地元で地域史を調べている郷土史家たちを想定して論じている。この指摘は非常に重要であり，かつ筆者自身でも別稿を立ててこの論点については詳しく論じたいと考えているが，本稿に限って言えば，後者で一志が郷土史家を念頭に置いていた点にはいささか不満が残る。

というのは，筆者としてはさらに一歩進んで，郷土史家ですらない，一般の人たちが編纂する地域史誌に着目しているからであり，それが冒頭に述べた「字誌」「大字誌」などになるからである。

これらの地域史誌は，先に見た沖縄県以外でも，北海道，山形県，新潟県，長野県，福井県，滋賀県，兵庫県などで盛んに作られてきた（高田，2015b，12-13頁）。またここに名前を挙げた以外の各都府県でも，恐らく筆者の知らないだけで夥しい数が編まれてきたと思われる。

ところで別のところでも述べたことだが，こうした地域史誌についての先行研究は少なく，そのほとんどは沖縄県の「字誌」に限られてきた（高田，2015a，66頁）。それは具体的には中村誠司と末本誠によるものであり，前者は沖縄県内で「字誌」がどのくらい編纂されてきたのか，それはどのようにして作られてきたのかという研究⁷⁾，後者は社会教育の立場からのものであり，「字誌」の編纂が地域の社会教育とどのように関係づけることが出来るかを，現場での聞き取りを通じて明らかにした研究であった（末本，2013）。

これらに対して，筆者はやや異なる視角から，地域史誌を検討したいと考えている。それは「地域の歴史は誰が書くのか」という問いかけからである。この問いかけについては，筆者は不完全ながらもこれまで各地で地域史誌を調べ，その編纂者にインタビューを行ってきたが，本稿では，上記二者と同じく沖縄県の「字誌」を素材にして，実際の地域史誌編纂者のインタビューを紹介していくことにしたい。

具体的には同県読谷村渡慶次区を取り上げるが，これは，同地区が比較的近年に「字誌」をまとめたこと，その「字誌」は上下二巻に渡っているうえに，DVDの製作や区のウェブサイト上で「字誌」を公開するなど先進性も有していること，これが初めての「字誌」編纂ではなくて二度目の編纂であること，渡慶次区を含めた読谷村では各区の諸活動が非常に活発であることなどのため，事例の紹介として堪えられるだろうと考えたからである。ただし，「字誌」の作り方は非常に多様であり，場所によってそれぞれ異なっている。したがって，渡慶次区の事例が沖縄県の「字誌」編纂の代表例とか典型という意味で提示するのでは決してないことは，あらかじめ記しておきたい。

なお，同県名護市では，前掲の中村誠司が中心になって既に1991年に『字誌づくり入門』を出し，「字誌」を作る際の手順などについてイラスト入りでわかり易く説明している（名護市史編さん室，1991）。⁸⁾ 本稿で紹介するのは，いわば同書で書かれていた「字誌づくり」の具体的な事例であり，「地域の歴史は誰が書くのか」を考えるための素材である（以下では煩雑を避けるため，「字誌」「大字誌」「地域史誌」のカッコをはずす）。

3. 地域史誌を編集する——ある字誌編集者へのインタビュー——⁹⁾

3.1 沖縄県読谷村渡慶次区

本稿で見えていくのは，読谷村渡慶次区で『続 渡慶次の歩み（上・下）』を，2000年に刊行した際

に編集委員長を務めたY氏からの聞き取りの記録である。

沖縄県読谷村は、本島中部の西海岸にある。村とはいえ、同村は人口が4万人を超えており、2015年10月時点で日本国内で最も多くの人口を有する村となっている（読谷村公式サイトによれば、2016年1月末現在で、40,740人）。

読谷村は、先の大戦時、1945年4月1日に米軍が沖縄本島に上陸した際の上陸地点として知られ、その後の地上戦で文字通り村中を蹂躪された。そのため村民のなかからも多数の犠牲者を出し、助かった者もことごとく避難を余儀なくされ、戦争終結後も米軍によってすぐに村に戻ることが許されなかった。その後、村域に人びとが戻って村を立て直してからも、米軍基地が村の多くの面積を占め、また米軍による事故や事件も少なくなかった。

しかし、1974年に山内徳信が村長に就任して以降、基地用地の返還や文化の育成など強力なむらづくりが推進された。なかでも1975年から始められて毎年11月初旬に催される読谷まつりは、村全域を包み込む一大イベントとして読谷村を象徴するものとなっている。また、伝統工芸品の育成・保護も手厚く行ってきたので、読谷山花織ややちむんの焼き物など、沖縄を代表する工芸文化も育っている。同村では、「読谷村史」の編集も30年以上にわたって継続しており、このことは、先の大戦によって多くを失った村の歴史を再現する作業が行われ続けていることを意味するといつてよい。

読谷村はまた、字誌づくりも盛んである。村内は24の字に分かれているが（このうち横田区は2014年に設立されたばかり）、そのほとんどで既に字誌が作られているか、または現在編集集中である。なかには、一度作られたものの何十年か後に今一度編集しているという地区も幾つかある。ここでみる渡慶次区もその一つである。

渡慶次区は読谷村のなかでも北西部に位置しており、戦前まではもちろん農村地帯であったが、沖縄県内の他の地域と同様に、戦後は軍作業が主な収入源になった。今日では既に軍作業が主な産業ではなくなったが、専業農家もほとんど無くなっており、多くが那覇市などに勤務先を持つ俸給生活を送っている。

先に読谷村がむらづくりに熱心であるといったが、なかでも渡慶次区は地域づくりが盛んなところである。例えば、読谷まつりの少し前の10月中下旬に、毎年渡慶次まつりが開かれており、地区全体の大きなイベントとして、同区を象徴するものとなっている。また、毎年開催される読谷村総合体育大会でも、区を挙げてほとんどの種目に参加して優秀な成績を収めているなど、種々の団体活動も極めて盛んである。¹⁰⁾

こうした渡慶次区の字誌の編集者を、筆者は読谷村史編集室の職員（当時）を通じて紹介してもらった。インタビューは渡慶次区公民館で、前後3回にわたって行った。2012年9月6日、2013年8月23日、2015年3月18日である。またそれ以外でも公民館で区長たちから補足的な聞き取りをした。

3.2 読谷村渡慶次区の編集委員長へのインタビュー

①1971年刊行の『渡慶次の歩み』

渡慶次区では、1971年に既に一度字誌を刊行していた。『渡慶次の歩み』というタイトルであり、字の公民館建築15周年記念としてのものであった。とはいえ、字誌刊行の要望はそれよりかなり早く、1964年頃には出ていたという（同書287頁の「経過」によると、「一九六四年 この頃より沿革作成の必要性が強調される」とある）。それは、沖縄戦後の復興過程を含めて、公民館建築10周年記念として出そうとの企画であったが、実現できなかった（同じく「経過」では、「沿革編集委

員が纏まらず資料収集が不可能となり、選定された編集委員は自然解散の形となる」とある)。そういう経緯の後に、公民館建築15周年にはぜひということを出されたものであった(「経過」では、「一九六七年 行政委員で沿革編集委員会の再編成が行われる。……公民館十五周年までに完成を見るようにする」と)。

今回の『続 渡慶次の歩み』で編集委員長を務めたY氏によれば、この『渡慶次の歩み』の存在が非常に強くY氏を刺激したということであった。

というのは、同書は非常に貴重な文献・記録であり、字の先輩たちが作っておいてくれたことがとても有難かったのだが、その一方で、字の歴史である以上、このことは書き入れておいて欲しいということが書かれていないものがあったことと、同書刊行から既に30年以上が経過しているため、その間の変化についても記録として残したいという思いが、Y氏にはあったからである。また同書の「編集後記」で、「さらに今後何年かの後には秀れた陣容によつて、もつと価値ある渡慶次誌ができることを望んでいる」と書かれていたことも、新たな字誌編集へとY氏を後押しすることになった。

今回のY氏を中心とした字誌の編集では、このようなことから『渡慶次の歩み』の続編という意味で『続渡慶次の歩み』と名づけられた。

②編集の契機

今回の字誌づくりの発案者はこのY氏であり、以後の編集もすべてY氏を中心になった。Y氏は1936年に渡慶次区で生まれ、その後も今に至るまでずっと(戦中戦後の一時期を除いて)渡慶次区で暮らして来た元中学校教員である(教頭職だった時、校長試験には通って赴任校も決まっていたが、体調を崩したためにそこで退職されたという)。

字誌を編集したいということを、Y氏はまず区長に話した。そして字の先輩たち4人に話を持って行き、素案を作った。これはいわば準備委員会のようなものであったが、それほど格式ばったものではなく、むしろ私的に相談したと言って良いので、委員会というほどのものではなかった。この4人はいずれも1920年代の生まれで、当時70代から80代であった。

この後、Y氏は区長を通じて、字誌の件を「行政委員会」に提案した。「行政委員会」は区の審議機関で、毎月1回定例会が開かれており、「行政委員会」にY氏は2～3回呼ばれて説明した。¹¹⁾ その際、「字誌は今作らなければならない」という説明の仕方をした。この「行政委員会」で了承されると、次には「総会」の認証を得た。「総会」は世帯主からなる戸主会で、毎年2回開かれ、渡慶次区ではいつも120～130人ほどが出席していた。

字誌編集という案に対して、「行政委員会」でも「総会」でも反対意見はなく、全会一致で認められた。いずれの場合も、「あんたが元気なうちにぜひやってくれ」と、Y氏は激励を受けたということである。

区では、「総会」で認めた後で、字誌編集のために毎年予算を組んだ。それは主に人件費であった。人件費は後述のように囑託のための給金で、毎月15万円(賞与などはなし)、15万×12ヶ月なので年間で180万円であった。

人件費以外には、1年目に業務用のパソコンを始め、いろいろな文具購入の必要があったが、これらは通常の前算の雑費のなかで買われたので、字誌のために雑費を別途予算化したということではなかった。

(ちなみに字誌編集のための費用として、上記の他に大きいのが印刷・製本費である。これについては、結果的に渡慶次区では、印刷・製本・DVD作成・ウェブサイト上での公開などの諸作業として、一括して某印刷会社に依頼している。

もっとも、読谷村には「ノーベル平和賞を夢見る村民基金」(「ノーベル基金」)という制度があって、申請して認められれば字誌編集に対してそこから助成を受けることができる。これまで幾つかの区で字誌編集のために「ノーベル基金」を受けており、渡慶次区でも申請したところ100万円の助成が認められた(上限が100万円)。これは印刷費としての助成であった。¹²⁾

Y氏は、こうした経費について、次の点を幾度も強調していた。

渡慶次区には相当の資産がある。区の年間収入を見ても、そうした資産からの収入、すなわち「財政積立基金会計」が50%以上を占めている(「沖縄県読谷村渡慶次 人を思いやる心づくり・むらづくり」より)。こうした資産があることを見越して、Y氏は字誌の編集も提案したのだということであった。

とはいっても、Y氏は渡慶次区に資産があることを自慢しているのではない。そうではなくて、渡慶次区に資産が形成された経緯には、人びとの渡慶次区に対する思い入れの強さ、自ら犠牲を払った人の存在があったことなど、渡慶次のこれまでの成り立ちに感動があることを、むしろ強調したのである。渡慶次区の資産形成には次のような経緯があったという。

明治期、琉球王国が大日本帝国の沖縄県になって、土地制度の改変も行われた。その際に読谷村域でも山林の解放があり、それらが村内各字に振り分けられた。つまり山林が各字の資産になったのであったが、その後多くの字で財政が苦しくなり、山林を売却してしまった。

渡慶次区でも財政がどんどん苦しくなり、とうとう1920年頃には売却することが決定された。しかし当時の青年会のメンバーがこのことに強く反発し、他に何か良い案があったわけではないのだが、とにかく自分たちの資産を手放すことには大反対だと主張して、売却案を撤回させた。そうした青年たちの意気を感じて、字財政の負債を、ある有力者が肩代わりしたのだという。そうしたわけで山林の資産が渡慶次区には残った。

これが、戦後にアメリカが沖縄を基地化したことで軍用地となり、地代収入が渡慶次区に入ることとなった。そして軍用地の地代はその後上がったため、今では上記のように、かなりの資産が渡慶次区にもたらされることになったのである。

Y氏はこのように述べ、当時の青年会員たちの字を思う心意気や、負債の肩代わりをした有力者を慕っているのである。そして、Y氏の念頭には、この資産があることで財源的には字誌編集の予算化は大丈夫という思いがあったのだということである。

③編集の方針

一般に自治体史でもそうだが、地域史誌の編集刊行にあたっては、地域の歴史を書きたい、まとめたいという気持ちが幾ら先走っても、編集のための事務処理が必要であるし、さまざまな資料や情報の整理も必要になる。そのため囑託を頼むことが多々あるので、渡慶次区でも囑託を置くことにした。そして前述のように、そのための人件費を予算に組んだ。囑託は、「パソコンを使うことができ、まとめる力に秀でた人で、月酬15万円」という条件で区内で公募したところ、男2人、女1人の計3人の青年が応募し、面接の結果、Xさん(20代・女)が囑託に選ばれた。

ところでY氏が言うには、「字誌の編集には2つのやり方があると思う」ということである。

1つは、最初に目次を作って、それに見合う必要なもの／不必要なものを取捨選択していくやり方である。しかし渡慶次区ではこの方法は採らず、次の方法を取った。

すなわち、まず編集委員を決めて編集委員会を毎月2～3回の頻度で開いて、6～7ヶ月間くらい検討する。そして、字誌のなかに〇〇を書く／書かないということ話し合い、項目を立てる。そして委員会で検討して、〇〇は必要／××は不要という議論をした。例えば、「前の字誌になかったのは〇〇だ」ということを列挙したり、「前の字誌から40年近く立ったのでその間のものを

書くことは必要なことだ」といったことなどを議論して、どんな構成にするか、具体的に決めていった。

その際、Y氏は、「何よりもまず地域に何を残しておくべきかを考えよう」ということを念頭に置いていたという。そして結果的には予定よりも1年遅れてしまったが、「50年後、100年後を考えよう」という方針で刊行できたということであった。

④編集の進め方——編集委員会について

字誌編集のためには、その実際の行動部隊というべき編集委員会が必要となる。したがって渡慶次区ではまず編集委員会を組織し、Y氏自身が編集委員長になった。これは、Y氏が字誌編集の発案者だったということに加えて、元教員でいわば区の有識者だったからでもあろう（Y氏は、2015年3月時点では村の老人会長を務めてもいた）。

編集委員会の人選については、Y氏が行ったという。その際、男女比、年齢比も考え、意図的に若い人や女の人にも委員になって貰った。編集委員として8人を選定し、Y氏自身と先に挙げた囑託を合わせて合計10人が、編集委員会のメンバーとなった。当時の年代等は次の通りである。

Y氏——60代（男） 編集委員長

Aさん——60代（男）

Bさん——70代（男）

Cさん——50代（女）

Dさん——50代（女）

Eさん——50代（女）

Fさん——40代（男）

Gさん——20代（男）

Hさん——40代（男）村職員として村史編集の経験あり。

Xさん——20代（女）囑託

このうち、C、D、Eの3人には主に婦人会等をやってもらった。

Gさんはまだ若かったが、「後輩の面倒見が良いし、地域の歴史や文化のことを私によく質問して来たから、そうしたことに興味が有るのだろうと思って声をかけたら、ふたつ返事で喜んで引き受けてくれた」という。

それと実際の編集時に大きな力を発揮したのはHさんで、彼は現に村役場に勤務していて村史編集の経験も知識も豊富で、こうした刊行物の編集のノウハウを熟知していたからであった。囑託のXさんは若いだけにパソコン技術に習熟していて、また非常によく整理・提案をしてくれたので、事務方としてとても助かったという。

このような編集委員会のメンバーについて、Y氏は、「主力は60代、70代だったが、40代のような比較的若い人もおり、また囑託も含めて女の人が4人加わっているなど、バランスが取れたものだったと思う」と評している。

さて実際の編集委員会であるが、地区によっては「毎月第二・第四月曜日」などというように決めるところも少なくないが、渡慶次区では定期的に開くということではなかったという。そのため次回の日程は、そのつど決めていたということである。

また、先にも少し触れたように、目次や章立ては、編集委員会で話し合いながら決めた。そして、「次回までに子ども会についての資料を収集しておこう」とか、「今度は婦人会、老人会について集めよう」というようにテーマを課して、次回までに準備して備えたという。このような方式であったため、目次を作ったのはいちばん最後になった。そして書けるところからどんどん書

いていったところ分量が増え、上下本になってしまった。当初は2冊本にすることは考えておらず、結果的に2冊になったということである。

編集作業はたんと進めていったが、刊行予定が延び、「今年中には何とかまとめないとならない」という年には、編集委員のなかから3人ほど選んで、編集委員長のY氏と合わせて4人くらいの「小委員会」を開いて進めて行った。

また、出来上がった字誌のなかに、誰がどこを書いたかという執筆分担は記載しなかった。字誌や自治体史でも末尾には「執筆分担」欄があって、「第〇章 誰それ」と書かれることが多いのだが、渡慶次区では、「みんなで書いたからそうした「執筆分担」欄は設けなかった」ということである。というのは、編集委員就任時に、例えば「〇〇さんは教育・文化担当」とか「××さんは年中行事」といったように、あらかじめ各自の分担を決めず、編集委員会の議論のなかで執筆分担が図られていったからであった。

なお、実際の執筆には渡慶次小学校百年史とか婦人会何十年史といった、既存の本やパンフレット、『広報よみたん』や『公民館だより』など既刊の刊行物から関連する記事を拾い上げ、それをまとめていった。その際、囑託のXさんがあらかじめ調べて、「〇〇についてはここにこんな資料がありますよ」ということを教えてくれたことが有難かったという。

また、原稿が出来てから後の校正は、先にも少し書いたように村史編集の経験があるHさんと、やはり囑託のXさんが行った。写真や全体のレイアウトは、先の「小委員会」でやったということである。

以上のような字誌編集の取り組みであったが、渡慶次区で特徴的なのは、区民のために「編集だより」を出したことであった。これは現在字誌を編集していることを区民に熟知してもらうために出したもので、区内の全世帯に無料で配布した。毎号の「編集だより」は大変に評判が良く、情報、写真などの収集には大いに役立った。また「これこれのことがあるので、話をぜひ聞きに来てもらいたい」という声も幾度もあり、反響の大きさを思い知ったという。このように、「編集だより」は非常に評判が良かったので、「今思い返しても見事だったと思う」、「区民に「編集だより」を通じて知らせることが出来た意義は大きかった」と、Y氏は語っていた。そして最終的には、「編集だより」自体を記録として残すために字誌のなかにぜひ入れてくれという要望が区民から起こったので、字誌の末尾に附録的に入れたのだが、ページの都合上最終号までは入れることができなかった。

渡慶次区の今一つの特徴は、書籍としての刊行だけでなく、DVDも製作したことと、字のウェブサイトを通じてインターネット上で見られるようにしたことである。こうした試みは沖縄県内の字誌ではほとんど無かったし、同じ読谷村内で同時期に字誌編集を進めていた高志保区や座喜味区でも作っていない。

このうち、DVDの製作は、編集当初から念頭に置かれていた。エイサーや組踊りなどの伝統芸能についてはどうしても写真と文章だけでは限界があり、映像が必要だと考えていたからであり、そうした視覚的なもので伝統芸能などは映像として残したいという動機からのことだった。

他方で、インターネット上での公開については、Y氏は想定していなかったという。これは村史編集の経験が豊かにあったHさんの提案になるものだったということである。ただ実際に字誌が出来上がった後で、インターネット上での字誌を見て、全国からの反響があったということで、このことにはY氏も満足している。

そして、このようにして出来上がった字誌は全部で千部刷った。県内の各公共図書館や小中学校、諸機関に配ったということである。

⑤字誌には書かないこと

そもそも字誌の編集をY氏が思いついたことの背景には、次のような経験もあったという。

まだY氏が若かった頃、区の老人会である「渡慶次青洋会」が5年ごとに周年誌を作っていたので、それを手伝ったことがあった。その際、「5年ごとに作るのは早い、10年ごとにしましょう」と言った。そうしたら、「あなたは若いから分からないだろうが、10年も経つうちにわれわれ老人は死んでしまう」と老人たちから叱られてしまい、それ以後も「青洋会」では5年ごとに周年誌を作った。

また、区の運動場を1987年に作ったが、これも大変だったという。「運動場のために土地を譲ってくれ」とお願いして幾軒ものお宅に何遍も出掛けて行って断られた先輩たちが多かったが、そうした苦難を経てようやく運動場が出来た時にも、『渡慶次運動広場竣工記念誌』という記念誌を作った。

こうした経験があったので、Y氏は、ぜひ字誌を作りたいと考えていたという。

こうしたY氏は、筆者からのインタビューに先立って、「なぜ地域誌か」という文書をあらかじめ作って来てくれていたが、そこには次のようなことが書かれていた。

- i. 「渡慶次青洋会」の老人たちの話のなかで、「地域」に対する先輩たちの愛着を強く感じた。
- ii. 『渡慶次運動広場竣工記念誌』の冒頭の挨拶のなかで、「渡慶次の歩みのなかでこれほど困難をきわめ、難渋を重ねた事業はほかに例がありません」と書かれていて、「先輩たちの心意気」、「先輩たちの「地域」を愛する気持ちが溢れている」と強く感じた。
- iii. 「先輩たちの足跡をそのまま残していくことが大切と思う。」それに、「こうした地域誌づくりが「地域力」につながって行くのであり、「地域力」は皆で高めていこう」と思った。

Y氏が字誌を提案したのは、以上のようなことが背景としてあったということである。

ただし、「先輩たちの足跡をそのまま残していくことが大切」とはいっても、字誌では何でも書いてよいわけではなく、書けないこともある。『続 渡慶次の歩み』の編集委員会でも、その葛藤と議論があった。Y氏によれば、そうした書けないことは、特に終戦直後に彼らが経験したことに多かったということである。

そうした経験を字誌に書くかどうかについてはY氏も迷ったが、現にある編集委員は書いてきた。これに対して、編集委員会内ではそれを載せるかどうか、かなりの議論となった。それは、こうしたことを書くべきか否かということでもあるが、何か一つ書いたらそうした類いのことはそれこそたくさんあるからで、全部を書き出したら字誌として収拾がつかなくなりかねないからだった。

そのため、さんざん議論をした挙句、結局その編集委員が書いて来た原稿はボツにすることにした。字誌の主旨とは違うという理由からだ。もちろん、委員の中には「1971年に出された『渡慶次の歩み』には過去の困窮の歴史についてはまったく触れられていなかった。だから今回のものには、それを書くことによって我々の生活がいかに困窮していたかを歴史として残すことになる」とはいえ、本当の「生の歴史」として書き残しても良いではないか」という意見もあったが、結局、掲載せずということになった。

書けなかった内容について、筆者は具体的にインタビュー時に聞いている。しかし、書けないこととして字誌にも載せなかったのであるから、本稿でも詳細は書くわけにいかない。が、字誌編集の中心がY氏ではなくて、渡慶次区では暮らしていない専門家たる歴史家が担当していたら、

「たとえ困窮の歴史であったとしても、それは歴史として正確に書き残すべきである、歴史を直視してこそ未来の地域づくりにも役立つのだ」という意見が多くを占めて掲載されるに至ったであろうことは想像に難くない。というのも、ボツになった原稿の内容を聞いてみると、いずれも部外者ならびに専門家から見れば、一種の社会史として貴重な体験談といえるものばかりだからである。しかしY氏としては、「終戦直後の私たちの生活は、衣食住に事欠くような状況の中で、米兵たちに弄ばれていたように思う」と語っており、そうした惨めな思いを記録として子孫に書き残したくないため、字誌への掲載を見合わせたということであった。

このように、字誌の編集には葛藤や議論の分岐もしばしばあったが、最後に筆者が、「そもそも字誌がなぜ沖縄で盛んに作られていると思いますか」と聞くと、Y氏は、「ゆいまーる、ゆいの精神、お互いに助け合うことが根底にある」と答えていた。

4. 今後の課題

前章の沖縄県読谷村渡慶次区の事例から、地域社会で暮らす一般の人たちが編む歴史について、その一端を見ることが出来たと思う。実際の執筆時に、既刊の『広報よみたん』や『公民館だより』などから関連記事を集めてきて、それらをまとめるということからも分かるように、そもそも字誌は必ずしも一次史料に依拠して歴史を書いていくものではない。またそこでは書いて良いことと良くないことを意図的に識別していた。このように、Y氏が語る字誌編集の過程は、専門家である歴史家が叙述する歴史とは異なる面が少なくないのである。

そこで次に、Y氏が語った編集事業から何が言えるのか、また実際に刊行された字誌の内容を具体的に検討していくことで何が言えるのかが課題となる。しかし、本稿は研究ノート、インタビュー紹介という性質上、これらについては論文の形にして改めて別稿で展開することにしたい。そこで、最後にこうした地域史誌について語り得ることの可能性を示唆することで、本稿を閉じることとしたい。

実は、本稿ではこれまで無前提に歴史という語を使ってきたが、Y氏の語りからも分かるように、字誌や大字誌など地域史誌で書かれていることは、厳密にはいわゆる「歴史」だけではない。ここでいう「歴史」とは、出来事(事件)の起こったことを時系列的に書いていくものを想定しているのであるが、地域史誌で書かれていることにはそうした「歴史」だけではなく、むしろ衣食住や寺社、祭りなども含む「民俗・生活」に関する記事も多い。さらに、婦人会や青年団のような地区内の組織や集団の「記録」という側面も持っている。そのため、地域史誌の「まえがき」や「あとがき」では、「当初は地域の歴史を書くことを意識して「〇〇史」というタイトルを想定していたが、書き進めているうちにこれは単なる歴史ではなくてむしろ生活全般を記録したものであるから、「〇〇誌」と、タイトルを変えました」という主旨の文章に出会うことが非常に多い。

これは、出来事(事件)を時系列的に叙述した「歴史」と、そうした「歴史」を取り巻いている「民俗・生活」、さらには種々の「記録」の諸側面が別々に存在しているということではなく、地域で暮らす一般の人たちにとっては、これらを併せ持ったものとして歴史が実感されていることを意味しているからだと思う。つまり、これらすべてが混然一体したものが彼らにとっての歴史なのである。

先に挙げた郷土史家の一志茂樹は、歴史家の家永三郎が、「歴史研究の尊さは時を究明することにある、時を問題にしていないものは歴史研究じゃない」と書いていることを批判し、「人民の歴史には特定の時のないのが普通であり」、「事件でも起こさない限り、限定した時は出てこないの

であります。……坦々とした日が続くわけでありませぬ。必ずしも日々好日ではありませんが。その間に時折大きな起伏があるというのが村の生活であります」と語っている（一志, 1976, 20頁）。家永が述べたように、出来事（事件）の時間を確定すること（「時を究明すること」）が、歴史家にとって基本的な重要課題であることはいまでもない。しかし「村の生活」の歴史を考える場合には、一志が述べるように「特定の時のないのが普通であり」「坦々とした日が続く」ものであることも事実であり、それが先に見た「民俗・生活」に相当するのである。そうであればこそ、地域史誌では出来事（事件）の歴史と、それを取り巻く「民俗・生活」、それに加えて「記録」という要素のすべてを含んで書かれることになるのであり、だから名称も「〇〇史」から「〇〇誌」へと変更される事例が多く見られるのである。

このような点から見て、筆者は、非専門家である一般の人たちが書く地域の歴史が、専門家たる歴史家の描く歴史とどのような点で異っているのかを見据えたうえで、改めて人びとの歴史意識を問う必要があると考えている。¹³⁾

というのは、歴史家がこれまでまとめてきた史学史では、本稿で検討してきたような地域史誌はもちろんのこと、いわゆる郷土史家たちの業績すら入って来なかったからである。例えば、2003年に刊行されてから10年経った時点でも、「この間これを超える日本近代史学史の通史的研究はでていない」（今井, 2013, 90頁）と高く評価された永原慶二『20世紀日本の歴史学』でも、郷土史家はほとんど出てこない。¹⁴⁾ましてや一般の人たちがどのような歴史を描いて来たかはまるで触れられなかった。その意味で、「地域の歴史は誰が書くのか」という問いかけを通じて、一般の人たちが書く歴史について再検討の要を説き、その一例として読谷村渡慶次区の事例を取り上げたのが、本稿であるということができよう。¹⁵⁾

また、社会学者の佐藤健二は、歴史学とは異なって、「民俗学や社会学がとらえようとする歴史は、現在の心意や行動のありように、無意識なままに作用している過去の構造である」と指摘している（佐藤, 2011, 22頁）。つまり、ここよりすれば、「構造」としての歴史を検討することが問われているのであるが、地域史誌もこうした指摘に沿うかたちで改めて検討する必要があると思われる。そしてこの点を、今後の筆者の課題として考えていくこととしたい。¹⁶⁾

付 記

本稿は、平成27～29年度科学研究費補助金基盤研究（C）「地域社会における歴史意識の展開—地域史誌編纂に関する社会学からの検討—」（課題番号15K03861, 研究代表者：高田知和）の研究成果の一部である。

謝 辞

本稿作成にあたり、御多忙のなかをインタビューに御協力いただいた読谷村渡慶次区のY氏の他、同区の区長と字誌編纂委員の一人であったH氏には感謝に堪えない。ここに謝意を表したい。

注

- 1) 千葉県我孫子市の事例については、高木（1994）、『齊藤博史学集成Ⅱ 地域社会史と庶民金融』（2002）を参照。
- 2) 埼玉県草加市の事例については、前掲『齊藤博史学集成Ⅱ 地域社会史と庶民金融』を参照。
- 3) 兵庫県尼崎市の事例については、辻川（2000, 2010）を参照。
- 4) 兵庫県香寺町（現姫路市香寺町）の事例については、大槻（2006）、大山（2006）を参照。

- 5) 沖縄県内の自治体史編纂については、沖縄県地域史協議会(2011)の他、同協議会が毎年出している『あしびな』各号を参照。
- 6) ヘイドン・ホワイトが「歴史学的過去」と「実用的な過去」とに分けて考察していることがこの点に関連していると思われるが(ヘイドン・ホワイト, 2010, 24-25頁), 筆者自身はホワイトの説を現時点では消化し切れていないので, ここでは指摘のみにとどめておく。
- 7) 中村誠司には「字誌」についての論稿が多数あるが, さしあたり, 中村(1999, 2000, 2005)を参照のこと。
- 8) なお, 前掲中村はこの時期, 「字誌」づくりの推奨のためにさまざまな研修会で啓蒙活動を行っていたと語っている(「沖縄・やんばる40年——地域史づくりに関わって 中村誠司さんを囲む」(2003, 197-198頁)。
- 9) 本章で扱う読谷村渡慶次区では, 編纂という語ではなく, 編集という語を用いていた(編集委員, 編集委員会, 編集委員長など)。そのため, 以下では同区のことを扱う際には, 編纂ではなくて編集という語を用いることにする。
- 10) 渡慶次区の区長はまだ30代前半と若いですが, 渡慶次区内のこのような団体の活動が若い世代にとっても楽しいものであり, 「区の役員になるのが面白いんです」と語っていた(2015年8月5日聞き取り)。
- 11) 「行政委員会」は字の審議機関であり, 2015年8月時点では15名からなっている。この15名はいずれも各種団体長の務めを終えた「有識者たち」だという(2015年8月5日区長からの聞き取り)。
- 12) この部分, つまり雑費と印刷・製本などの費用については, 区長と、『続 渡慶次の歩み』編集委員の一人だったH氏からの聞き取りによる(2015年8月5日, 6日)。
- 13) なお, 歴史の書き手として歴史家以外についても検討する必要性は, 前掲ヘイドン・ホワイトや, ホワイトによる影響もあって成田(2010)や岡本(2013)などでも指摘されている。
- 14) 同書に出てくる郷土史家としては, 一志茂樹(同書, 186頁)と, 必ずしも郷土史家とはいえないが, 民俗学の宮本常一(206-207頁)について触れられている程度である。なお, 永原のようにディシプリンとしての歴史学を対象にした史学史では郷土史家は出てこないが, 民俗学や郷土教育史研究の地平では正面から考察されている。例えば, 伊藤(2004)を参照。
- 15) 越前大野藩の城下町大野の研究者であるドイツ人のマーレス・エーラスは, 本稿とは異なる観点から「地域史は誰のものか」を問題にしている(マーレス・エーラス, 2010, 104-106頁)。また彼女の指摘については, 塚田(2015, 28-30頁)も参照のこと。
- 16) なお, 北海道平取町でアイヌ民族の視点から貝澤正が中心になって作られた地域史誌『二風谷』について検討したのとして, 新井(2012)がある。同稿は, 本稿とは異なる視点であるが, 同じように地域史誌のあり方を問うたものといってよい。筆者は, 本稿では沖縄の「字誌」についてしか検討を加えなかったもので, 北海道の地域史誌については別稿として立てて改めて検討したいと考えている。

参考文献

- 新井かおり 2012「アイヌの集落が自らの歴史を語り始めること——貝澤正が編集する『二風谷』の到達——」『応用社会学研究』第54号。
- 一志茂樹 1976『地方史の道——日本史考究の更新に關聯して——』信濃史学会。
- 伊藤純郎 2004『柳田国男と信州地方史——「白足袋史学」と「わらじ史学」』刀水書房。
- 今井 修 2013「歴史の思想」『岩波講座 日本の思想 第一巻「日本」と日本思想』岩波書店。
- 大概 守 2006「住民がつくる地域史の試み:『香寺町史 村の記憶』地域編を編纂して」『歴史科学』第186号。
- 大山喬平 2006「ムラの歴史を考える——香寺町史『村の記憶・地域篇』のこと」『歴史科学』第185号。
- 沖縄県地域史協議会編集・発行 2011『琉球・沖縄の地域史研究——沖縄県地域史協議会の30年——』。
- 2007「沖縄県読谷村渡慶次 人を思いやる心づくり・むらづくり」渡慶次公民館。
- 2003「沖縄・やんばる40年——地域史づくりに関わって 中村誠司さんを囲む」『東アジア社会教育研究』第18号。
- 岡本充弘 2013『開かれた歴史へ——脱構築のかなたにあるもの——』御茶の水書房。
- 2002『齊藤博史学集成Ⅱ 地域社会史と庶民金融』藤原書店。
- 佐藤健二 2011「近代日本民俗学史の構築について／覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第165集。

- 末本 誠 2013『沖縄のシマ社会の社会教育的アプローチ——暮らしと学び空間のナラティブ——』福村出版.
- 高木繁吉 1994「市民参加の自治体史——我孫子市史の編纂」『岩波講座 日本通史 別巻2』岩波書店.
- 高田知和 2005「『自治体史誌の社会学』序説——地域の歴史を書くこと／読むこと——」『社会学が開く人間科学の地平——人間を考える学問のかたち——』五絃舎.
- 同上 2009「自治体史の社会学——地域の歴史を書く・読む・見る——」『年報社会学論集』第22号
- 同上 2010「マージナルな立場からみた自治体史」『地域史研究』第39巻第2号.
- 同上 2015a「地域で地域の歴史を書く——大字誌論の試み——」野上 元・小林多寿子編著『歴史と向きあう社会学——資料・表象・経験——』ミネルヴァ書房.
- 同上 2015b「地域で地域を書く「大字誌」」『年報 香寺町の歴史』第9号.
- 塚田 孝 2015「地域史認識の深化——大阪歴科協と和泉市史での経験から——」『歴史科学』第220号・221号合併号, 大阪歴史科学協議会.
- 辻川 敦 2000「自治体史編さんの再検討——尼崎の事例から——」『歴史評論』第598号.
- 同上 2010「尼崎市の史料館事業と編集事業」地域史惣寄合呼びかけ人編『第一回地域史惣寄合報告集 地域史の現在』飯田市歴史研究所.
- 渡慶次字誌編集委員会編 2010『続 渡慶次の歩み 上巻・下巻』沖縄県読谷村字渡慶次区 渡慶次公民館.
- 永原慶二 2003『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館.
- 中村誠司 1999「沖縄の字誌づくりと地域史研究」『東アジア社会教育研究』第4号.
- 同上 2000「沖縄の字誌づくり」新妻二男・内田 司編著『都市・農村関係の地域社会論——再生産論・生活文化論・自治体論——』創風社.
- 同上 2005「沖縄の字誌づくり——既刊字誌等の目録情報のデータベース化から——」『東アジア社会教育研究』第10号.
- 名護市史編さん室編 1991『字誌づくり入門』名護市教育委員会.
- 成田龍一 2010「三つの「鳥島」——史学史のなかの「民衆史研究」」『思想』第1036号.
- ヘイドン・ホワイト (佐藤啓介訳) 2010「実用的な過去」『思想』第1036号.
- マーレス・エーラス 2010「地域史惣寄合に参加して」『第一回地域史惣寄合報告集 地域史の現在』.
- 山城吾助編 1971『渡慶次の歩み』渡慶次公民館.